令和4年度　学校経営計画・学校評価シート

高知県立盲学校

《高知県の教育の基本理念》	（1）学ぶ意欲にあふれ、心豊かでたくましく夢に向かって羽ばたく子どもたち （2）郷土への愛着と誇りを持ち、高い志を掲げ、日本や高知の未来を切り拓く人材	《目指すべき姿》	学校像	視覚障害教育の専門性を発揮し、 生きる力を育む確かな教育を推進する学校 （1）一人一人が確かな学力と専門技術を身に付け、社会参加と自立に向けて学ぶ意欲を持てる学校 （2）一人一人の人権が尊重され、安心して学習・生活ができる環境が整った学校 （3）地域のニーズに応える、視覚障害教育のセンター的機能を発揮する学校 （4）教職員一人一人が教育公務員としての自覚と誇りを持ち、切磋琢磨、協働しチームとして教育に取り組む学校 （5）幼児児童生徒、保護者、地域、県民から信頼、必要とされる社会に開かれた学校	目指すべき姿の実現に向けた取組の概要	「チーム高知盲、100年目に向けて着実に歩みを進めよう！ ～高めよう専門性、広めよう地域・社会に～」 令和4年度キーワード 高知盲 『GIGAスクール推進！』 ＆『魅力発信！』 「超スマート社会（Society5.0）」の到来に向け、デジタル社会において自ら積極的に情報を収集・活用し学び続けることができる視覚障害幼児児童生徒の育成を目指すための取組を積極的に推進する。また、盲学校の存在価値・魅力の発信と啓発を一層強化することにより、社会に開かれた学校としての役割を果たす。 ◆学校全体、教職員の視覚障害教育の専門性及びそれに基づいたICT活用力・指導力を向上させ、一人一人の児童生徒に応じたICTの活用を推進する。 ◆学習評価の充実に向けた取組をとおして、主体的・対話的で深い学びの推進による生きる力の育成を目指す。 ◆盲学校の存在価値・魅力の発信と啓発を一層強化することにより、社会に開かれた学校としての役割を果たす。 ◆校務支援システムの活用等による働き方改革を推進するとともに、やりがいを感じて働ける職場作りを目指す。
《取組の方向性》	《6つの基本方針》 ①チーム学校の推進 ②厳しい環境にある子どもへの支援や子どもの多様性に応じた教育の充実 ③デジタル社会に向けた教育の推進 ④地域との連携・協働 ⑤就学前教育の充実 ⑥生涯学び続ける環境づくりと安全・安心な教育基盤の確保 《6つの基本方針に関わる横断的な取組》 ①不登校への総合的な対応　　②学校における働き方改革の推進		幼児児童生徒像	夢に向かって「自らまなび」「社会とつながり」「たくましくあゆむ」 生きる力を育てます （1）【知】「自らまなぶ」　主体的、意欲的に学び続けることができる幼児児童生徒 （2）【徳】「社会とつながる」 周りの仲間とのつながりを大切にし、 社会参加できる幼児児童生徒 （3）【体】「たくましくあゆむ」 自ら障害に向き合い、 自己実現に向けて積極的に行動できる幼児児童生徒		

《重点取組項目》

（評価　A:目標を十分に達成　B:ほぼ目標を達成　C:やや不十分　D:改善を要する）

項目	取組ねらい 【P】	現状と目標【評価指標】	具体的な取組内容 【D】		中間評価 【C】●成果 ○課題	中間評価後の取組内容【P・D】		年度末評価 【C】●成果 ○課題		学校関係者評価	見直しのポイント 【A】
専門性の向上 視覚障害教育の専門性の向上	視覚障害教育の専門性及び授業でのICT活用力・指導力を向上させ、一人一人の児童生徒に応じたICTの活用を推進する。	《現状》昨年度1年間の積極的な取組推進により、教員の授業場面等でのICT活用力を向上させることができた。引き続き取組を推進するとともに、視覚障害教育の専門性の維持・向上及び教科等の専門性の向上が必要である。 ○教職員一人一人が担当する幼児児童生徒の指導・支援に必要な視覚障害教育の専門性及びICT活用力・指導力を向上させる。【専門性チェックリストによる確認】 ○各児童生徒の障害及び発達段階等に応じたICTの活用を推進する。【個別の指導計画への明記：100％・小中高の児童生徒が1日1回以上の活用：100%・全ての教員が授業等で毎日(1日1回以上)活用：100%】	○専門性チェックリスト・ICT活用スキルチェックの活用・確認 ○新転任者研修の効果的な実施 ○理療科教員によるサポート体制の継続・充実 ○中四盲情報交換グループでの情報共有 ○GIGAスクール構想推進プロジェクトチームによる取組推進(リーダー、教頭、関係分掌の長、各学部主事) ○グループ別ICT活用研修の実施（全盲単一・弱視単一・弱視重複、重度重複） ○ICT支援員、外部専門家の積極的活用	c	●「視覚障害に関する専門性」チェックリストを実施することにより、現在の自身の視覚障害教育の専門性について把握することができた。 ●ICT機器活用状況のアンケートを実施し、現状の把握及び課題分析を行った。毎日使用の児童生徒64．7%、教職員毎日使用　30% ●新転任者研修（専門研修）においてそれぞれのグループで専門性チェックリストを活用して研修内容の充実を図っている。 ●理療科教員が点字使用以外の児童生徒のTTに入る機会が増えたことによりサポート体制が充実してきた。 ●GIGAスクール構想プロジェクトチームで課題等を共有し、ICT支援員の積極的活用につなげたり、今後必要な取組について全体に発信したりすることができた。 ●外部専門家活用事業(ORT,PT,OT各1回）実施した。 ●ORTによる学習会、クラフト教材を用いた学習会、大阪教育大学山本利和氏による研修会を実施し、専門性向上につなげた。 以上の取組により、生徒及び教職員とも日常的にICTを活用できるようになってきている。 ○機器の操作スキルにおいて教員間で差がある。 ○教科等の目標を達成するためのICT機器活用については、さらに研究を深める必要がある。 ○ICT活用時の姿勢、取扱い方、情報モラルについての指導・支援が必要。	・ICT使用状況等のアンケートの結果をもとに、ICT支援員の協力を得る等しながら、活用力の向上を図る。 ・専門研修グループにおいて評価専門研修グループで、チェックリストの結果のデータを可視化し、教職員の現在の専門性について課題を明らかにして専門性向上のための具体的な取組を進める。 ・理療科教員と連携した取組を今後も継続して行う。 ・中四盲情報交換グループでの情報共有を進める。 ・外部専門家活用事業を継続して行う。ORT、OT、STを招致し、実施数20件を予定している。年度末までに成果と課題を全体で共有し、次年度の取組につなげる。 ・外部専門家（ORT、ST、PT、OT）を招いた学習会を実施する。 ・学部研や専門研修で出された課題をもとに、専門性向上及び各教科等の専門性向上につながる研修会を行う。 ・今後も、ICT支援員の活用を計画的に進める。 ・ICT機器の使用方法等手順書を作成する。 ・ICT機器を使用するときの姿勢、取扱い方、情報モラルについての指導・支援を行うとともに健	B	授業等でのICTの活用が特別ではなくなり、教員のICT活用膂力・指導力の向上及び、児童生徒のICT活用が推進した。また、コロナ禍において登校できない児童生徒の家庭と学校間のオンラインでの授業を実施することができた。様々な取組により専門性の向上が図れた。 ●昨年度作成した各専門グループのチェックリストを新転任研修の内容に活かすことにより、より指導・支援に必要な内容に絞った研修を実施することができ、専門性の向上につながった。自己チェックリストによる振り返りや理療科教員のサポートにより専門性が向上した。【専門性向上チェックリスト15項目中14項目向上　舎：10項目中9項目向上】 ●児童生徒の発達段階や学習内容等により活用頻度の差はあるが、学校全体の活用頻度やその質を向上させることができた。【個別の指導計画への明記：100％】【小中高の児童生徒の1日1回以上の活用率91.2%(小96%，中100%、高89%、高理80%　】【各教員の授業等で毎日活用45.2%3日以上使用：87.2%】 ○児童生徒のICT活用の環境整備と、更なる教員のICT活用力、指導力の向上 ○教員の視覚障害教育の専門性向上のための取組の継続実施	B	・目標では活用率100%を目指しているが、学習の内容によっては、ICTを使用しないという選択肢もあっていと思う。 学習内容や目的に応じて活用していくことも必要ではないか。 ・コロナ禍において、長期に欠席しなければならなかったとき等、学校と家庭とをつないでオンラインで学習できるようになった。平常と同様の授業を受けることができた。地域の小学校等もICTを活用しているが、盲学校のICTの活用はより進んでいると思った。	○向上させる専門性の重点化と効果的な研修立案。 ○理療科教員とのさらなる連携。 ○視覚障害のある児童生徒の各教科等の系統性のある指導支援が実施できるようにする。 ○各教科等の目標を達成するためのICT活用力の向上 ○GIGAスクールサポーターの効果的な活用
キャリア教育の充実 主体的・対話的で深い学びの推進	学習評価の充実に向けた取組をとおして、主体的・対話的で深い学びの推進による生きる力の育成を目指す。	≪現状≫昨年度は、ICTを活用した授業改善の取組を全校で推進したことにより授業等での活用が進み、主体的な学習活動へと繋がった。本年度より、全学部において新学習指導要領に移行されることも踏まえ、指導と評価の一体化を目指した学習評価の充実に向けた取組を進める必要がある。また、時代のニーズに応じたSDGs等への取組推進が求められている。 ○各学部等で学習評価の充実に向けた研究、実践に取り組み、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進する。【各学部教育課程研での発表】 ○環境教育・SDGsの観点から、学校全体で食育活動に積極的に取り組むことにより生きる力を高める。【各学部、舎で、学期1回以上の取組実施：100%】	○学習評価についての研修会の開催 ○幼児児童生徒に身に付けさせたい力の明確化 ○カリキュラムマネジメントの一環としての「学習指導」と「学習評価」の取組推進 ○各学部の実践研究を教育課程研究集会において発表 ○キャリアパスポートの作成と活用 ○各学部等による発達段階等に応じた食育の推進とその成果の発表、校内外への発信	c	●広島中央特別支援学校の指導教諭、教諭を招致し、学習評価に基づいた授業づくり・授業改善の取組についての研修会を実施し、今後の学習評価の研究につなげることができた ●学習評価や評価用ルーブリックを用いた指導略案の校内統一様式を作成し、活用方法を周知したことにより学習評価についての理解を深めることができている。 ●各学部でのキャリアパスポートの使用を開始することにより、今後、身に付けさせなければならないことなどについて教員間で共通理解を図ることができた。 ●食育については、小学部で学校栄養職員と連携した授業を行い、児童への より良い指導支援につなげることができた。 ●毎月15日を「高知の食べ物いっぱいの日」とし、高知県の食材を多く使った給食を提供することにより、地元の食材への関心を高めることができている。 ○観点別評価規準、評価基準の的確な設定のための、教科の目標に対する児童生徒の学習状況の把握が的確にできるようになることが必要である。 ○食育については、一部の学部において個別の実施ができていない。	・評価基準の設定については、継続して検討を行う。 ・教育課程研（1月6日）において視覚障害教育における学習評価の充実に向けた研究発表を行う。事前に研究発表者と取組内容等について十分に検討し、今年度の成果と課題を整理する。 ・今年度の取組をもとに学習評価や評価用ルーブリックを用いた指導案の校内統一様式について検討してより良いものにしていくとともに、次年度の取組につなげる。 ・キャリアパスポートについては、点字使用の生徒の様式など本校に応じたものを今年度中に整える。 ・食育については、学校栄養職員と連携しながら全ての学部、寄宿舎で取組を進める。	A	指導と評価の一体化を目指した学習評価の充実に向けた実践的研究を推進することができた。SDGsの観点からの食育により、児童生徒の自発的な取組も見られた。 ●教育課程研究集会で各学部の学習評価の取組の成果と課題及び次年度の教育課程に関する提案を共有し、学校全体の取組とすることができた。【発表5本：学習評価の理解の深まり：100％（アンケート）　次年度に向けての提案：5件】 ●各学部・寄宿舎と栄養職員が連携した授業を実施するなどして、児童生徒の「食」に関する意識を高め、発達段階に応じた理解を深めることができた。【各学部・舎での学期1回以上の取組47回100％達成】 ○児童生徒の学習意欲の向上及び授業改善につながる学習評価の更なる充実及び視覚障害のある児童生徒の各学部での各教科等の指導の系統性の明確化。 ○卒業後の生活をより豊かなものにする生涯学習への意欲を向上させる取組推進	A	・目標として設定していたことは全て達成できている。 ・今年度の卒業生の進路先について知りたい。卒業後のフォローアップも大事にしてほしい。 ・学校周辺の交通安全について、今後も学校と地域とが連携して取り組んでいく必要がある。 ・地域の防災についても、学校と連携・協力しながら取り組んでいきたい。 ・今後は、ICTの活用も大事にしつつ、体験的な学習活動も大事にして児童生徒の深い学びにつなげてほしい。	○児童生徒の学習意欲の向上及び授業改善につながる指導と評価の一体化に関する取組推進。 ○各教科等における視覚障害のある児童生徒への系統性のある指導の明確化。 ○教育課程研集会で出された提案や各学部で出された教育課程に関する課題を次年度の教育課程の改善につなげる。 ○卒業後のよりよく生きる力の育成につながる食育や余暇活動の取組推進 ○地域と連携した学校安全の取組推進。
学校設定項目 盲学校の魅力発信	盲学校の存在価値・魅力の発信と啓発を一層強化することにより、社会に開かれた学校としての役割を果たす。	《現状》センター的機能の充実により、盲学校の存在や教育内容、相談機関として一定認知度が高まっているが、ひまわり教室、幼稚部、高等部理療科の幼児・生徒数について減少している。コロナ禍でも実施できる啓発活動の工夫が必要である。 ○県内の全ての視覚障害児・者及び家族が盲学校の存在や教育内容について知ることができるよう、教育・福祉・医療等の関係機関への啓発を更に強化する。【オンラインでの理解啓発事業：年2回実施】 ○学校での取組、学習活動等を広く校内外に発信するとともに、盲学校の専門性を積極的にアピールすることができる企画、出前講座等を実施する。【各学部等での取組：年間2回以上、ホームページ「視覚障害教育紹介」コーナーの新設】	○管理職、サポート部、進路部、理療科教員を中心にした、関係機関への直接訪問（ポスター、リーフレット等の配付）及び学校概要等説明の実施 ○関係機関への啓発機会の確保と実施、他機関と連携したイベントへの参加 ○本校主催のオンラインでの理解啓発及び指導・支援についての情報提供事業の開催（年2回程度） ○各学部・舎・分掌等で創意工夫した盲学校の魅力発信の取組実施とホームページへの掲載 ○全校体制でのホームページ「視覚障害教育紹介コーナー」の作成とホームページ、盲学校新聞等の活用による情報発信 ○弱視学級担任等へのグーグルクラスルームを活用した情報提供及び情報交換の実施 ○交流及び共同学習の取組推進 ○作品展等への積極的な出品	c	●関係機関への訪問は、理療科教員と連携して行い、12件訪問済である。 ●高知市の関係機関への訪問時に保育幼稚園課の巡回担当者に弱視の見えにくさからくる困難性や発達について説明することができた。 ●県内の特別支援学校と弱視学級が設置されている地域の小中学校に向けた研修会をオンラインで公開した。地域の小学校から1名、特別支援学校から1名が参加し、視覚障害教育における専門性が身についたとの声を頂いた。 ●中四盲研における研究発表を行い、本校のICTに関する教育実践を発表することができた。 ●弱視特別支援学級のネットワークづくりについては、2学期からの実施に向けて進めている。 ●視覚障害教育紹介については、ホームページ記載の原稿作成を学校全体で協力して行った。 ●居住地校交流3回実施、他の特別支援学校とのオンライン交流2回実施した。 ●紙と遊ぼう作品展への出品、環境標語、高知子ども新聞記者への登録等行い、本校の取組を発信した。	・各関係機関への理解啓発を継続して行う。 ・県の子ども支援課主催の市町村の母子支援保健師や母子支援コーディネーターを対象にした研修にて、見えにくさがある子どもの理解と視覚障害教育支援センターについて説明をする予定。 ・虹のかけはしのリーフレットのアップデートを行う。 ・弱視特別支援学級の担任とはグーグルクラスルームでの情報発信、情報共有を進める。 ・可能な限り、行事等での児童生徒の様子をオンライン視聴できるように準備する。 ・居住地校交流、中四国の盲学校との交流等についての取組を進める。 ・作品展等に積極的に出品をする。	A	コロナ禍においても、オンライン等の可能な方法を工夫し、盲学校の魅力を発信するとともに、可能な限り直接訪問を実施し、本校の魅力発信と理解啓発を進めることができた。 ●オンライン等を活用し、地域関係者に本校の取組を発信することができた。【オンラインの理解啓発活動:3回、弱視学級担任参加のクラスルーム開設、理療科PR動画DVD作成】 ●HPを活用して視覚障害教育の専門性等を発信することができた。HP版オープンスクールの掲載、各学部等合計5回発信】 ●機会を捉えて本校の取組を発信することにより理解啓発ができた。【地域の学校との交流及び共同学習9校、地域の防災研修会への参加、地域と連携した本校小学部防災学習の実施、作品展等への積極的な出品や大会等への参加46件】 ○SNSを活用したホームページの効果的な情報発信の方法等の検討及び、「視覚障害教育紹介」コーナーの定期的な見直し等の情報の更新 ○地域と関わる取組の推進やハイブリッドな理解啓発活動の継続的・計画的な実施	A	・いろいろと工夫をして情報発信できていると思う。 ・学校で作成した理療科の紹介DVDはYouTubeやホームページで紹介してはどうか。せっかく作ったものをより広く多くの人に知ってもらえるよう全国の盲学校の配信方法等を参考にして、いろいろな方法で情報発信をするとよい。 ・ここ数年、地域においても人と直接関わる取組ができていない、感染対策をしながら人と人とが直接関わる取組も進めていくことが必要ではないか。	○SNSを活用したホームページでの効果的な発信。 ○「視覚障害教育紹介」コーナーの充実 ○学校紹介の動画等の活用と充実 ○地域とつながる学習活動や啓発活動の推進
働き方改革	校務支援システムの活用等による働き方改革を推進するとともに、やりがいを感じて働ける職場づくりを目指す。	《現状》コロナ禍の清掃・消毒業務については会計年度任用職員等への業務分担により、教員の負担増は少なく抑えることができているが、子どもと向き合う時間の十分な確保に向けた継続した取組や児童生徒の指導・支援についての情報共有等の在り方について再検討が必要である。 ○校務支援システムの活用等による業務軽減、グループウエアの活用（資料事前配付等）による会議時間の短縮、精選により、子どもと向き合う時間を確保する。【ケース会、学習グループ・教科会等の実施：各学部月2回以上】 ○休憩時間の確保及び、時間外勤務、自宅での教材研究や授業づくりの時間を縮減する。【一人当たりの月平均時間外労働：35時間以下】 ○お互いに支援・援助の依頼がしやすく、やりがいのある職場を目指す。【学校評価アンケート：肯定的評価80％以上】	○各種様式の整理と統一、共有フォルダの整理、グループウエアの入力方法の統一等による時間軽減 ○グループウエアの活用等による会議等の持ち方の見直し及び時間短縮 ○会計年度任用職員等による清掃業務等の分担及び教材作成等支援 ○幼児児童生徒の指導・支援に関わる協議の時間確保（定期的なケース会や学習グループ、教科会の設定） ○校務分掌内での役割分担の明確化等により、業務の偏りを少なくする。 ○カリキュラムマネジメントシートの活用により、見通しを持った業務の遂行を図る。 ○ノー残業デイ及び警備開始時間の徹底、「休日のまとめ取り」の活用 ○夏季休業中の一斉閉庁日の設定 ○メンタルヘルス研修、ラジオ体操の実施	c	●グループウエアで周知を図る等して会議の精選など行っている。 ●分掌部会前に資料を作成し、分掌内で検討しなくてはならないことを事前に伝え、当日の会は時間内に終わらせている。 ●定例の会議の内容を精選することにより学習グループに関する会議を設定することができた。それにより学習計画などの連絡を多くとることができ、学部内での連携がスムーズになってきている。 ●ノー残業デーはほぼ定時に退勤できている。 ●「休日のまとめ取り」は3名活用した。夏季休業中に一斉閉庁日を設定することにより、連続した休暇の取得を推進することができた。 ●メンタルヘルス研修を実施し、セルフコントロールの方法を学ぶことができた。ラジオ体操については、各教室等で行う教員が増えてきつつある。 ○各種様式の整理と統一、共有フォルダの整理、グループウエア入力方法の統一については十分に進んでいない。 ○校務分掌部内での役割分担は少しずつ進んでいるが、業務の偏りはまだ見られる。	・次年度の行事予定を作成する中で、削減できるものを削減していくよう調整を図る。 ・ICTを用いたグループ協議の積極的活用を行い、効率的に会議ができるようにする。 ・各種様式の整理と統一、共有フォルダの整理、グループウエア入力方法の統一に関する取組を進める。 ・分掌部の役割分担を進める。 ・引き続き、幼児児童生徒の指導・支援に関わる協議の時間確保ができるよう、会議の精選等の取組を進める。	B	会議のもち方や共有フォルダやグループウエアの活用により、会議の短縮や精選を行うなど業務改善につながった。 ●会議の精選等により、子どもに向き合う時間や教材研究の時間を設定することができた。【教科会、学習グループの会、指導支援に関する会を学期に2回以上実施。一人当たりの月平均時間外勤務時間15時間】 ●お互いに支援・援助しやすい職場づくりを意識して業務ができた。【学校評価アンケート…意識した働き方ができた。肯定的評価96％】 ○分掌業務等の役割分担の明確化と平準化の具体的取組の推進 ○会議の精選と会議のもち方のさらなる工夫による児童生徒の指導支援に関する協議時間の確保。	B	・自宅に持ち帰って仕事をしている先生方も多くいると思う。教材研究や授業づくりを持ち帰って行う時間も含まれた数値が出るようなデータのとり方はできないだろうか。 ・一人一人の児童生徒の思いに丁寧に向き合いながら必要な支援ができるよう取り組んでほしい。	○分掌業務等の見直しや平準化を更に進める。 ○児童生徒指導・支援に関する協議時間の確保 ○カリマネシートの効果的な活用。 ○業務、行事等の精選と削減 ○様式の定型化。